

令和4年度塩尻志学館高等学校 卒業証書授与式 式辞

朝日に輝く西の穂高連峰、夕日に染まる東の八ヶ岳は、未だ雪を戴き銀嶺として輝いています。そんな冬の残像を背に、今、日に日に強さを増す太陽が、信州松本平ここ桔梗ヶ原を土の香り湧き立つ春へと導いているようです。

本日、ここに日頃から本校に対しまして格段のご支援・ご高配を頂いておりますご来賓のご臨席を賜り、令和五年度長野県塩尻志学館高等学校卒業証書授与式を3年ぶりに全校生徒が参加して挙行できますこと、誠に喜ばしく、衷心より御礼を申し上げます。

191名の卒業生の皆さん、本日はご卒業おめでとうございます。

卒業式にあたり、教職員を代表して御祝いの言葉を申し上げます。

皆さんにとって、塩尻志学館高等学校での三年間の生活はどうだったでしょうか。

振り返りますと、皆さんは在学中の3年間は新型コロナウイルス感染症感染拡大のリスクと隣り合わせの学校生活を強いられました。入学間もなく5月まで県下公立高校は一斉休校を余儀なくされました。希望に胸膨らませての高校生活が2ヶ月遅れのスタートとなりました。これまでの間、感染状況の波に左右されながら授業・行事・クラブ活動が行われてきました。そんな中で皆さんは「当たり前でできたことが、当たり前でできない。」そんな不自由さに屈することなくいてくれたと思います。最上級生となり迎えた生徒会最大の行事「桔梗祭」では、4年ぶりに全校生徒が体育館に入り開閉祭式を行うことができました。そして、文化祭が原因で感染クラスターは発生することはありませんでした。クラスのダンス練習など事前の準備や当日の企画運営など、皆さんが感染予防行動の模範を全校生徒に示してくれた成果だと感謝しています。

卒業式にあたり、皆さんがこれからの人生を歩んでいくうえで、心に留めておいてもらいたいことをお話しします。日本の古典三大随筆と称される一つに「方丈記」があります。鎌倉時代、鴨長明が残した作品です。作品の冒頭に記されている「ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず。」という一節を紹介します。現代語にすれば「川の流れは絶えることがなく、しかも決してもとのと同じ水ではない。」となります。鴨野長明は平安時代末期から鎌倉時代前期に活躍した歌人であり、随筆家でありますが、この時代は大火災・伝染病・大地震に見舞われた大変不安定な時代でした。端的に言えば「明日のことはわからない。」といった状況にあったと言えます。その中で長明は『この世に常なるものはない』と覚悟を決めて生きる方が、まわりの動向や他人の思惑に左右されることなく、心穏やかに生きることができる。絶対的なものを追い求めないことで、世の中の変化を柔軟に受け入れることができ、よりしなやかに強く生きて行けることができるだろう。」と説いたのです。この考え方は、かつての日本人がもつ「無常観」に基づきます。私たちは、4つのプレートが衝突する日本列島に住んでいて、過去何度も大地震、火山噴火等の自然災害に見舞われ、それまでの日常が壊されても、大切な人を突如失っても、その悲しみから何度も立ち上がりながら、この国で生きてきました。その中で、育った意識が「無常観」と言えます。お金さえあれば、大概のものが自宅に居ながら手に入る時代、政府と産業界が推進するソサエティー5.0「超スマート情報化社会」でますます現実と仮想が入り交じり、今、目の前に起きている変化を受け留める感覚が麻痺していくのではないかと心配です。

今、日本はVUCAの時代に突入したと言われています。

V (Volatility ボランティリィ：変動性)

U (Uncertainty アンサートウンティ：不確実性)

C (Complexity：コンプレクッスティ：複雑性)

A (Ambiguity: アンビグイティ: 曖昧性)

一言でいえば、「予測困難な時代」です。

例えば、ロシアのウクライナ侵攻が、原油価格の高騰を招き、物価高を引き起こし、私たちの生活を苦しめることになることを、予測できたでしょうか。3年前、中国の地方都市武漢に新しい伝染病が発生した時、そのウィルスが全世界に蔓延し、それまでの「当たり前」を奪い、日本では、これまで7万人を超える尊い命を奪うことになる、と予測できたでしょうか。

卒業生の皆さん、これから社会で自分の身の回りで起こる「変化」、それが自分にとって不都合であったり、悲しいことであっても、目をそらさず、起きていることを自分の眼で見つめ、頭を動かして考え、他者の意見を聞いて客観視して、慌てず騒がず、人のせいにせず、ゆっくりと自分と家族と周囲に人にとって良い方向に歩きだして欲しいと思います。

そのトレーニングを塩尻志学館高校の教育プログラムの中で、知らず知らずに皆さんは積んできたのです。1年次「産業社会と人間」2年次「キャリアプランニング」3年次「キャリアデザイン」そして「総合研究」といった総合学科ならではのキャリア形成を高めるプログラム。毎日、先生方の多様で多角的な考えに触れた「志学の時間」。一つ一つを先生方は、教科の授業準備に加えて時間をかけて、チームで議論して、大切に作りあげてきました。「普通じゃないから、オモシロイ」本校が外部に発信するキャッチフレーズです。「オモシロイ」は、多くの労力の上に成り立っていたことを伝えたいと思います。皆さんは「課題をみつけること」「課題の解決に必要な調査をすること」「他者と協働して自分の考えを高めること」そして、「自分の考えを他者にわかりやすく伝えること」、これからの時代を生きるために必要なスキルを高めるトレーニングを繰り返して来たのです。

「水」はその器に合わせて様々な形に変わる柔軟性を持ちます。「水」は温度によって、ちょっとした力では砕けない固体になります。また、気体となり空間を自由に飛び回ることができます。壁にぶつかったとき、どうか「水」のように留まらず、姿を変えることを恐れず先へ進んでください。

続きまして、本日ご列席をいただきました保護者の皆様におかれましては、お子様のご卒業、誠にありがとうございます。心よりお慶び申し上げます。この三年間、本校の教育活動につきましては格別のご支援、ご協力をいただき、誠にありがとうございました。

コロナ禍にあって、ご家族の体調管理、とりわけ新型コロナ感染症に罹患されたご家族が出た場合には、わが子が学校で感染を広めてしまうのではないかという不安の中、大変なご心労された方も居られたことと拝察します。今日のよき日は、保護者の皆様の支えなくして迎えることはできなかったと思います。

卒業後、お子様が残るご家庭、巣立つご家庭、両面あると思いますが、18歳といっても精神的にも経済的にも「自立」ということはなかなか難しいかと思います。しかしながら、真の「自立」に向かってお子様とも接し方についても、この「卒業」は大きな節目となります。私も、3人の子を巣立たせた親として、必ずしも立派な親とは言えませんが一つ思うことは「子どもは自分の持ち物ではない。」ことです。親として「子どもがいることで、自分の心を支えてきた気持ちから卒業する。」ことが大切です。つまり、「親自身も精神的に子どもから自立する。」ことが大切です。ころから先、勤め先で学校で子どもに災難が降りかかっても、それを肩代わりしないよう努めてください。お子様が、自ら災難を解決するよう優しく見守ることが大切です。間違った方向にお子様が進もうとした時だけ、一人の大人として意見してください。その理由は、簡単なことです。「親は子どもと一生いられない。」からです。

口はばったいことを申し上げ大変失礼かと存じますが、今、申したことは私自身、親として子どもから自立するために苦労しましたので、この機にお話しておきたいと考えました。

結びに、卒業生の皆さんがほぼ毎日取り組んだ「志学の時間」のサブタイトル「学ぶことは生きること」を胸に生涯学び続け、例え願いが打ちのめされても再び立ち上がって自分らしく生きることの続け健康で社会に貢献していただきますことをお願いするとともに、ご来賓・保護者の皆様の今後の御健勝を祈念致しまして、式辞とします。

令和5年3月3日

長野県塩尻志学館高等学校 校長 宮川安司